

スポーツの傷害と障害をなくす —指導者の心得—

田神一美 編著 (筑波大学出版会)

窪田辰政^{1,2)}, 山田幸雄²⁾

(1) 静岡産業大学, (2) 筑波大学体育センター)

スポーツ・運動の実践に伴う健康問題が存在する。本書は、いずれも体育・スポーツ指導者である著者の研究成果からあぶり出されてくる現実を凝視し、全国の仲間がこの問題への対応を呼びかけている。

例えば、競技者レベルにある若者に限らず、健康運動や高齢者の健康増進運動でもスポーツ障害が発生しており、スポーツマンの夢や活動的な高齢者の実現を妨げる要因となる可能性があることを、筆者らは衛生学の視点から指摘している。我々体育・スポーツ指導者は、「スポーツ即善」と考えがちであり、スポーツや運動によって健康がむしばまれることがあるとは考えたがらないものである。本書は、こうした現実を正面からとらえ、これを絶対に乗り越えてゆかなければ体育・スポーツの150年に及ぶこの国の歴史がけがれることになる」と指摘している。しかも、スポーツ障害を乗り越える担い手は、スポーツ指導の現場に立って選手や競技者を指導する体育・スポーツ指導者であり、選手や競技者を守るための実践によるというのである。過去の健康問題の多くは、市中に出た保健師などの実践によって解決を見ている。スポーツ障害が多発している現状をこの国の健康問題と見て取ることができる体育・スポーツ

指導者であれば、スポーツ衛生学の果実として「勝利」を獲得できる近道を歩むことが可能になると述べている。

スポーツ障害を除くスポーツ関連疾患として、さまざまな感染症から登山中の道迷いまで扱われている。感染症では水泳プールにまつわる豊富な事例は圧巻である。塩素消毒が無効な病原体による下痢症への対応が、スポーツ衛生学が取り組むべき緊急の課題である。熱中症予防に関する記述では、他では読むことのできない独自の論理展開が行われている。この論理は仮説でありながら不思議な妥当性と現実味を帯びている。筆者らは、論理の構築に向けて実験を重ねるとともに、熱中症予防の新しいコンセプト作りを通じて、安全なスポーツ環境創出を目指している。

衛生学は生命と健康を守る科学の一領域であるが、この領域がスポーツ活動をする人々だけを対象として出版物にまで結実させたことは驚きである。衛生学や公衆衛生学では、病気の存在とその原因を明らかにし、見つけた原因を取り除く技術によって、私たちの社会に蔓延した様々な病気を排除する試みを成功させてきた。「スポーツ衛生学」は胎動を始めたのかもしれない。